

氏名(本籍)	齋藤祐子(埼玉県)		
学位の種類	博士(芸術学)		
学位記番号	博甲第4805号		
学位授与年月日	平成20年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	「構造社」研究		
主査	筑波大学教授	博士(芸術学)	守屋正彦
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	五十殿利治
副査	筑波大学准教授	博士(芸術学)	直江俊雄
副査	大分大学准教授	博士(文学)	田中修二

## 論文の内容の要旨

### (目的)

「構造社」は、1926(大正15)年に彫刻家の齋藤素巖(1889-1974)と日名子実三(1893-1945)により「立体芸術の研究及発表」を目的に結成され、彫刻を主とした在野公募美術団体として1944(昭和19)年まで活動した。同会の特色は「彫刻の実際化」という主張を掲げ、社会や大衆の生活に近い彫刻制作を志向した点にある。昭和前期の彫刻界において在野系の有力団体の一つに数えられ、独自の創作活動を展開した「構造社」の存在は早くから注視されていたものの、長い間通史での断片的な紹介に留まり、広く知られるようになったのはここ数年のことである。その重要な契機に、2005(平成17)年宇都宮美術館を中心に開催された「構造社-昭和初期彫刻の鬼才たち展」がある。同展の開催により「構造社」研究は飛躍的な進展をみせたが、従来の研究は昭和初年の動向を中心としており、その活動については十分に考察されているとは言い難い。昭和前期の彫刻の諸動向に関する基礎研究の進展が待たれている昨今の状況を踏まえれば、「構造社」の全体像を明らかにすることは急務の課題である。本論は先行研究の成果を土台に、同会の全体像を解明し、その活動の同時代的な意義や美術史上での再評価を目的としている。

### (対象と方法)

本論は「構造社」の活動が「彫刻の実際化」という主張のもとに展開した点に着目し、その主張がどのように具体化されていったのかを1928(昭和2)年から1943(昭和18)年までの展覧会活動を追いながら考察し、美術史上の位置づけを明確にする議論の土台とした。また、齋藤素巖をはじめとする中心的な会員については、それぞれの独立した作家研究によって、蓋然的な評価にとどまらず、詳細に動向を調査し、作家像を明確化することで構造社を有機的に捉えようとしている。

その具体的な考察として、本論を5章で構成し、第1章では「構造社」が「彫刻の実際化」を団体活動の指針とした動機を探求するため、同会を主宰する齋藤素巖をはじめ初期会員の大正期の活動状況を確認した。続く第2章では、在野彫刻団体として結成された「構造社」が、絵画部を伴う総合美術団体となり、彫塑研究所を開設するまでの昭和初年の組織上の動向を整理すると同時に、「彫刻の実際化」の実践的活動の展開を考察し、第3章では、同会の活動の主要な位置を占めた建築と関わる創作活動を取り上げた。特に、建築

と彫刻の統合を図る共同制作「綜合試作」ないし「綜合作」は同会を特徴づける実践と言及されながら、具体的な内容は十分に検討されてこなかったため、その展開を整理して研究の基礎固めを行っている。第4章は、「彫刻の実際化」の実践的活動の広がりとして、1932（昭和7）年ロサンゼルス・オリンピック芸術競技への日本初参加を契機に勃興した「スポーツ芸術」との関わりを論じた。また、同様の観点から商業美術と「構造社」の関係に着目し、商業美術家との連携を通して商業美術の立体造形の展開に寄与した一面を明らかにし、第5章では、1935（昭和10）年帝展改組以降の団体活動を考察した。まず、帝展改組を機に「構造社」が絵画部を解消し、彫刻団体として再出発する経緯を整理した。その上で、同会から分裂して興った新構造社（1936年結成）、第三部会（のち国風彫塑会と改称）、九元社など「構造社」と人的な繋がりのある団体に考察を広げ、帝展改組前後、建築や工芸と関わる総合的な創作活動が勃興した彫刻界の一面について論じた。

（結果）

著者は「構造社」の成立から終焉に至るまで、その団体に関わった主たる作家に着目し、その多面的な活動について、作家を通して解釈している。また、著者は「構造社」の最盛期を概ね1935（昭和10）年までと捉え、「彫刻の実際化」の旗印のもと幅広い創作活動が展開された点を詳細に論じ、それが個々の芸術意欲に基づくと同時に、同時代の美術や社会の動向と密接に関わっている点を指摘している。「彫刻の実際化」の実践的活動は、時代の推移とともに団体の中心的課題から個人的な課題へと移行していったが、個性の尊重と表現の自由を謳う団体の在り方は変わるところがなかったと解釈し、そうした集団の気風が、他の公募美術団体とは異なる独創的な展開を導き、在野系の有力団体と目される組織の成長を促したと結論付けた。

（考察）

著者は、「構造社」について、新しい傾向に寛容で、実験精神に富む団体と見做し、「彫刻の実際化」を標榜し、相互に、果敢に行おうとした気風が、作家の個性を引き出す良き土壌を醸成したと解釈している。また本論では「構造社」と同時代の諸団体の動向に言及したが、帝展改組前後に登場した彫刻団体の詳細については不明な点が多く、「構造社」研究の一環として、また、昭和前期の彫刻の諸動向に関する基礎的研究に資するためにも調査研究を進める必要を認め、今後の課題としている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

わが国の近代の彫刻はロダン、マイヨール、ブールデルらの影響が大きく、それらは大正期に渡仏した二科会や国画家の作家たちによって、近代彫刻の主流となって行った。彫刻は単体としての象徴性が重視されたためか、従来の美術史では構造社についての考察は十分に行われてきたわけではなく、2005（平成17）年に著者がその開催に協力した「構造社－昭和初期彫刻の鬼才たち展」では体系的、網羅的にその全貌を捉えた展覧によって、「構造社」研究は飛躍的な進展をみせたといっても過言ではない。構造社の成立は官展系の齋藤素巖、日名子実三が中心であるのも、在野団体が先行した近代彫刻のあり方と一線を画したと見てよいであろう。著者は、当時の美術界ではジャンルを横断する自由な創作活動が台頭し、従来の彫刻の概念では律しきれない立体構成物があらわれはじめたことについて、その時代気分を論じ、また、社会に眼を転じれば、都市化や生活様式の欧化が進み、都市生活者を中心に大衆文化が花開きつつあった点を「構造社」成立の背景として指摘した。その上で、立体造形としての彫刻の多様な可能性に着目し、社会との接点を求める「構造社」の活動は、このような美術の新しい地平を求める時代の気運と、生活環境が大きく変化しつつあった社会状況と不可分の関係にある点を論じ、その多様な展開を取り上げた結果において、「構造社」会員の作品には、齋藤素巖とイギリス近代彫刻の関係をはじめ、ドイツやベルギーなどを含む広範な西欧近代彫刻に対する関心を指摘して、これまでのフランス近代彫刻の影響を中心に検討されてきた西欧美術受容

研究の見直しの必要性について言及している。

著者は、「構造社」が主張する「彫刻の実際化」を念頭にその多様な展開を各章に分け、第1章、第2章において、当時の写真、文献・記事などを取り上げ、特に大正大震災以後の時代気分、都市化、生活様式の変化について言及して、「構造社」の成立、その活動の必然について論じている。また、彼らの活動の展開についても、第3章で建築と彫刻の統合を図る共同制作、「綜合試作」ないし「綜合作」を挙げ、また第4章ではロサンゼルス・オリンピック芸術競技への日本初参加を契機とした「スポーツ芸術」との関わりを論じ、同様の観点から商業美術家との連携を通して商業美術の立体造形の展開に寄与した活動を明らかにした。第5章では構造社の分裂、派生した在野の諸団体、建築や工芸と関わる総合的な創作活動が勃興した彫刻界の一面を指摘した。

本論文は、「構造社」の成立と展開、そして彼らの活動とその存在意義を克明に論じ、あらためて近代彫刻史上に位置づけ、また、これまで十分な論考が見られなかった点において、先駆的で、オリジナリティーのある論考として高く評価できるものである。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。